

考古

1 生出山山頂遺跡
都留市四日市場

遺跡の立地

標高701.4mの生出山山頂に遺跡は立地する。この生出山は、採石によってかつての姿を偲ぶすべもなく変わってしまったが、山頂部には東西約20m、南北約30m以上の平坦部があり、山頂から少し下ったところには豊かな湧水をたたえた沢があったと伝えられている。遺跡はこの山頂部を主体に拡がっていたようである。

この山頂部は見はらしが良く、市内はもとより四方を一望できる。

遺跡の調査

太平洋戦争中に油の不足を補うために松根油の採掘が行われた際、土器も採取されたことから、遺跡の存在が知られるようになった。

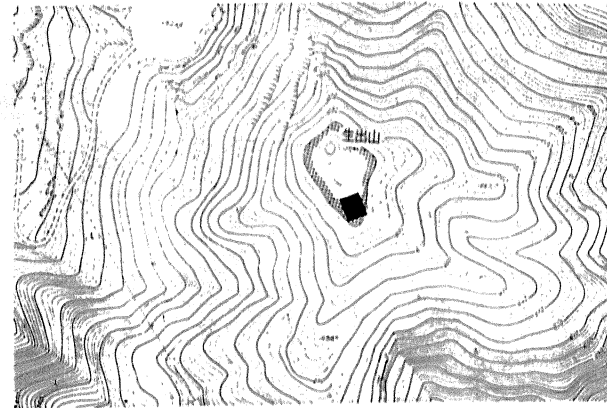
その後、昭和46年に都留市文化財審議会委員によって数回の踏査が行われ、山頂部で弥生式土器の破片十数片と縄文時代中期の土器片数片が採取され、遺跡の存在が確認された。

昭和52年に、生出山の採石を行

っていた第一石産運輸株式会社より、採石区及び鉱業権の取得申請が山梨県に出され、この内容を知った県文化課より市教育委員会に遺跡の照会があり、これを受けた市教育委員会では第一石産運輸株式会社と協議したところ、記録保存を目的とした緊急調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和52年5月9日から5月30日までの19日間にわたって、日本大学考古学研究会及び都留文科大学考古学研究会の会員の協力を得て実施した。この時すでに削平されて山頂部はなく、山頂より約100m程南東側に下がった緩斜面に調査区を設定し、調査に当たった。

調査の結果、縄文時代早期（今から約8,000年前）の住居址1軒、小竪穴3基を検出し、また、グリッドより弥生時代中期の条痕文系土器片及び環状の磨製石斧と、平安時代の坏形土器の破片が出土した。



第1図 遺跡の位置



第2図 調査風景

遺構

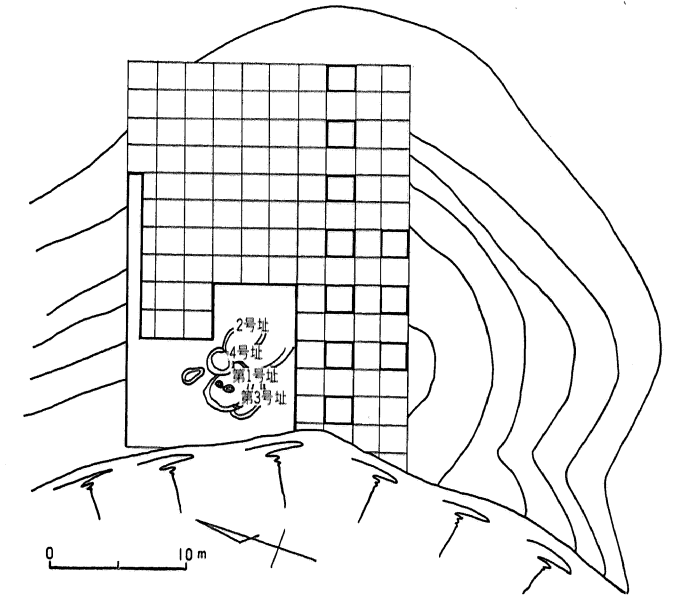
発掘調査によって、縄文時代早期の住居址及び小竪穴が4基検出された。これらはみな出土遺物がすくないものであったが、第1号址より楕円押型文土器の破片と石器類が出土し、これらによって住居址及び小竪穴の時期を比定する資料となっている。

これらの遺構は近接して構築されているために、すべて切り合っている。

これらのうち、第1号址は長軸4.3mの不整形形のプランを呈し、確認面から床面まで約21cmを測る。覆土中には多量の炭化物が認められ、また、覆土中や床面より楕円押型文土器片及び石鏃・磨石・スクレイパー・石皿などが出土した。

床面はほぼ平坦で、中央部に焼土の拡がり認められ、調査したところ数10cmの厚さで推積し、これが地床炉であることが判明した。これらより、第1号址は住居として利用されていたものと推察される。

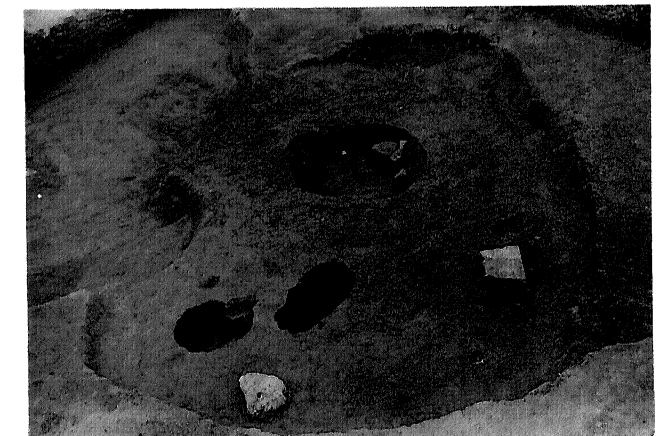
第2号址は楕円形プラン、第3・4号址は円形プランを呈し、このうち第3号址は直径3.8mの規模を有し、覆土中に多量の炭化物が含有され、また、スクレイパーなどの石器類が出土した。



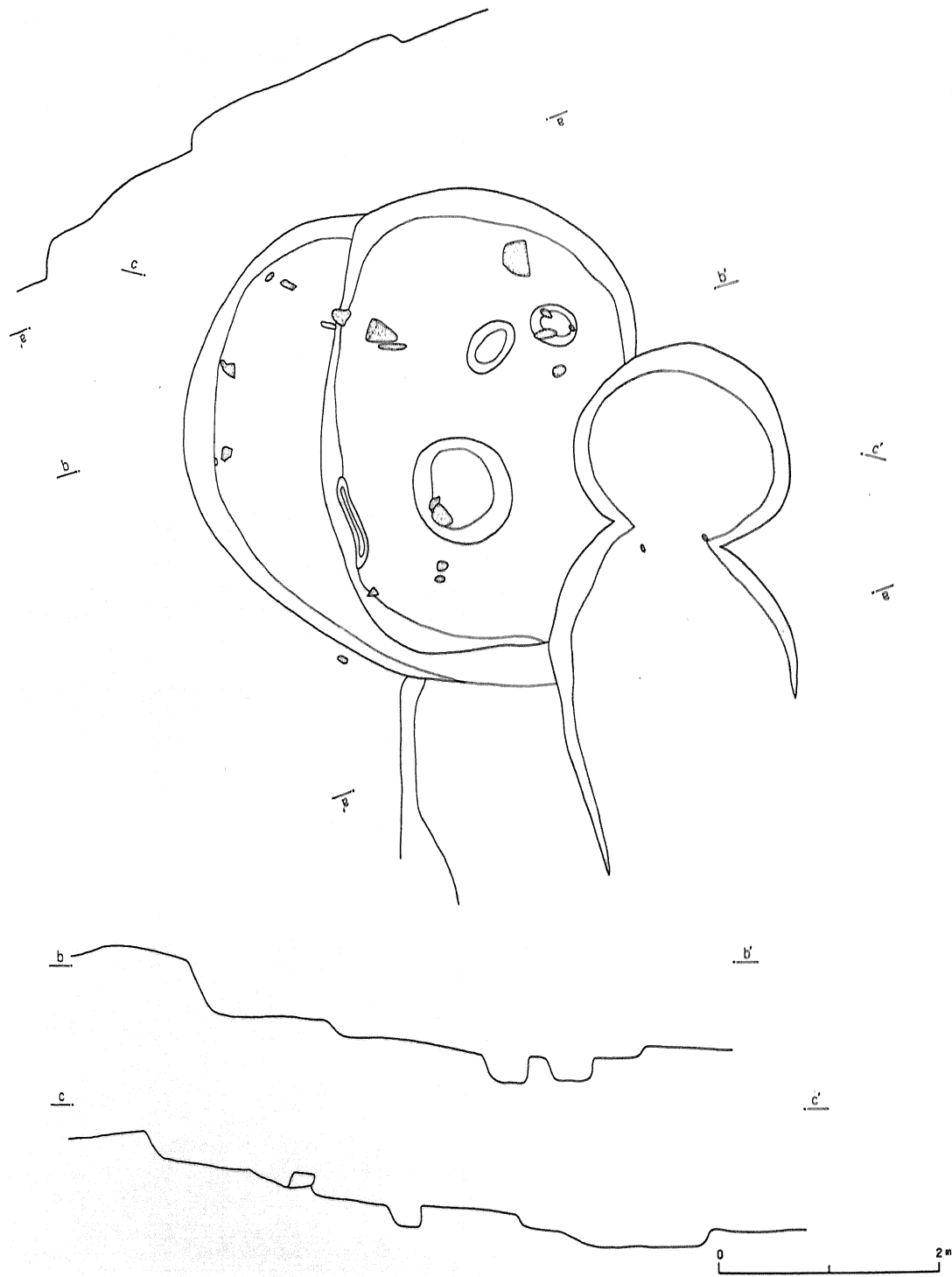
第3図 遺構配置図



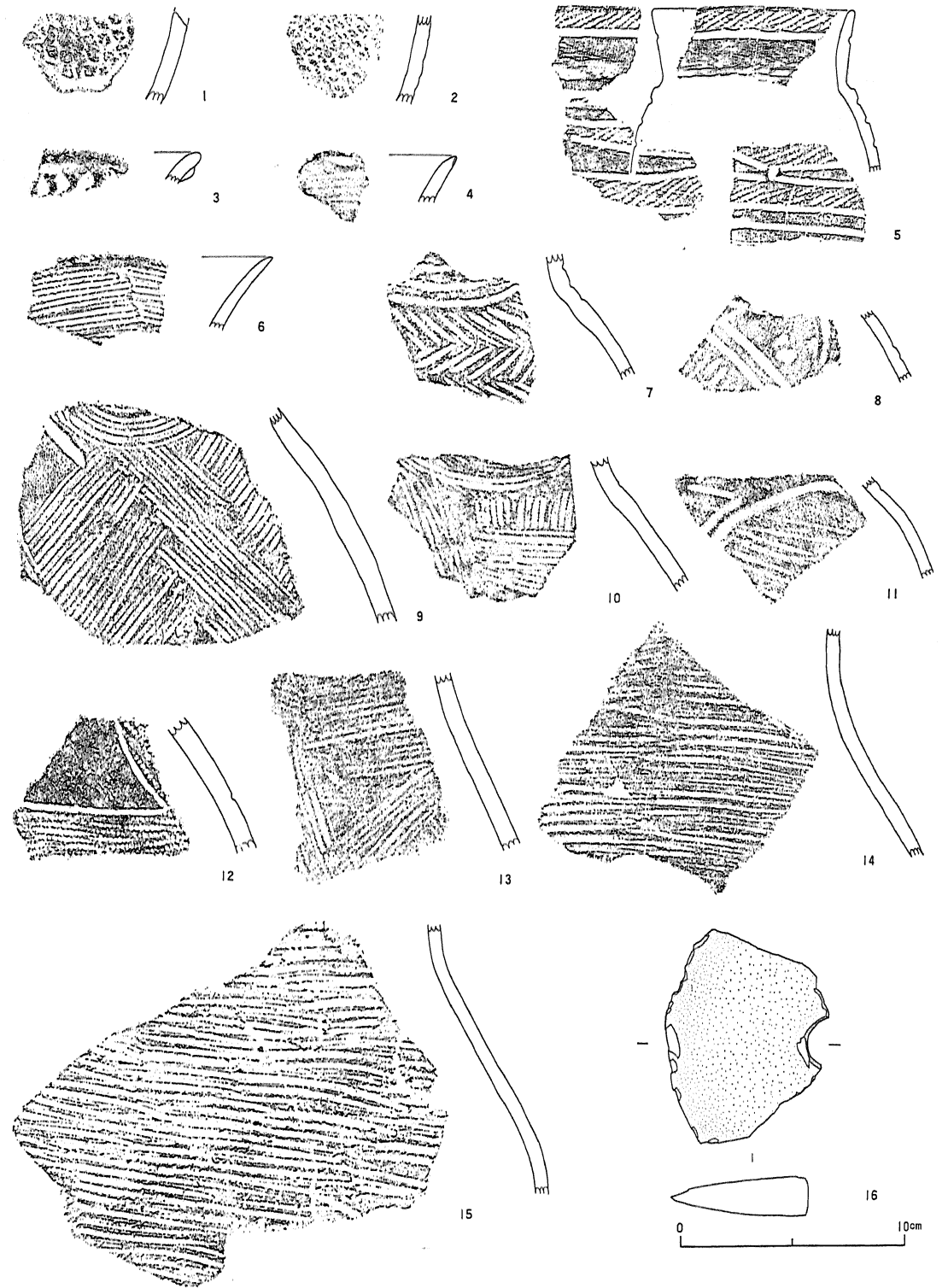
第4図 第1号址遺物出土状態



第5図 第1号址



第6図 1号址遺構図



第7図 生出山山頂遺跡出土遺物 (1)

遺物

1・2は1号址覆土より出土した縄文時代早期初頭に位置する楕円押型文土器の破片で、1はやや粗大な楕円を呈する。

3～15は弥生時代中期の土器である。これらのうち、3・4は口唇にも押捺が施された口縁部の破片で、甕形土器または壺形土器の破片である。5は縄文（RL）を地文として、棒状施文具によって網目状の沈線文が施された壺形土器の破片である。6は櫛状工具によって横位に条痕文が施された甕形土器の口縁部片である。7は頸部に三条の沈線文を巡らし、肩部には同じく横位に羽状沈線文が施された壺形土器片である。8・11は太い沈線文による区画と、その間隙に条線文が施された壺形土器の肩部の破片である。9は櫛状工具によって、頸部には弧状に、肩部には羽状の条痕文が施された壺形土器片である。10・13は櫛状工具によって、不規則に条痕文が施された壺形土器の肩部の破片である。

12は、棒状施文具による沈線区画文内に縄文（LR）が充填された壺形土器片である。14・15は櫛状工具によって横位に条痕が施された壺形土器の頸部から肩部にかけての破片である。

16は環状磨製石斧で、全周の6分の1程の破片である。刃部には刃こぼれが認められる。

調査の成果と課題

<市内最古の住居址>

生出山山頂遺跡で検出された第1号址は、長軸4.3mの不整形プランを呈するもので、この覆土及び床面から縄文時代早期初頭に位置する楕円押型文土器片や石鏃・磨石・石皿・スクレイパーなどの石器類が出土し、また、中央部には地床炉が認められ、厚く焼土が堆積していた。これらから、この第1号址は住居址であると推察される。

この時期の住居址は、県内でも発見例が少なく、富士吉田市の池之元遺跡、西桂町の寺野遺跡などでわずかに発見されているだけである。

この住居址は、現在までのところ市内で発見された住居址のなかで最も古い時期に属するものであり、都留市の先住者たちの生活をたどれる最古の資料である。

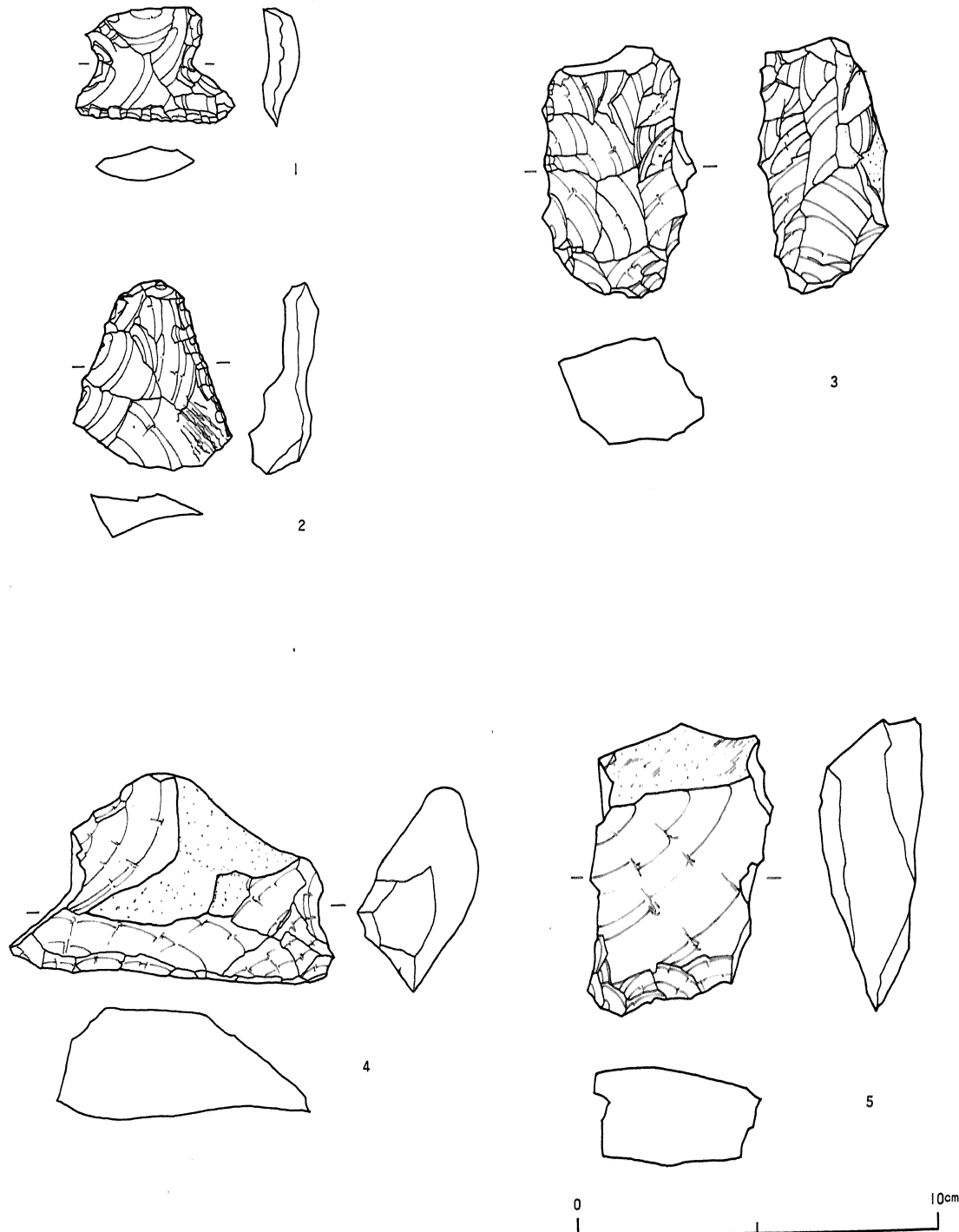
市内最古の住居址が、このような生出山の山頂に立地したのはなぜか興味深いところであるが、四方の展望が利き、あまり広すぎない平坦部と湧水に恵まれたこの地は、当時において生活に適した場所であったのかもしれない。

また、この時期は激しかった富士山の火山活動が鎮静化した頃であるが、先の池之元遺跡や寺野遺跡においても山蔭で富士山の火山活動の影響を受けないところに立地し、この生出山山頂遺跡に生活の跡を残した人々も、このようなことを考慮して、富士山の展望が利き、逸早く富士山の変調を察知できるこの地に、生活の拠点を構えたのではないかと想像される。

<弥生時代中期の土器>

本遺跡からはまた弥生時代中期の土器と石器が発見されているが、この弥生時代の資料はグリッドよりの出土で、遺構には伴っていないかった。

この弥生時代中期の土器は発掘調査以前にも採取されているが、この際も、これらがどのような状



第8図 生出山山頂遺跡出土遺物 (2)

考 古

態で出土したか不明であり、生出山山頂遺跡に弥生人たちの生活の痕跡はたどれるが、果たしてこの地に集落を営んだのか、それとも祭祀の場であったのか、今となってはその手掛かりとなるものは採石によって消え失せてしまっている。

本遺跡から出土した弥生式土器は、条痕文を主体としたもので、弥生時代波及期に属するものである。この時期の土器は器種の上で壺形土器が圧倒的に多く、文様としては条痕文以外に変形工字文や横位の羽状沈線文などが認められる。

この弥生文化の山梨県への流入経路として、長野県から北巨摩地方を経るルートと静岡県東部方面からのルートの二つが考えられるが、この生出山山頂遺跡の土器は後者の影響が看取されるものである。

遺跡の現状

遺跡は、継続的な採石によって跡形もなく消え失せてしまった。この生出山の山頂に遺跡があったということは、出土した土器や発掘調査によって記録された資料でしかたどることができない。



第9図 生出山山頂遺跡遠景

文 献

奥 隆行 『都留市の先史遺跡（上）』1976 都留市教育委員会

中山誠二 「甲斐における弥生文化の成立」P60 『山梨県立考古博物館研究紀要2』 1985